

第50回日本皮膚免疫アレルギー学会 総会学術大会を終えて

(2020年12月22～24日、高知市文化プラザかるぽーと)

※現地とWeb配信のハイブリッド開催

佐野 栄紀

高知大学医学部皮膚科学講座教授

はじめに

2020年12月22～24日の3日間、第50回日本皮膚免疫アレルギー学会総会学術大会を高知市の現地とWebとのハイブリッド方式にて開催しました。当初は4カ月前の8月に現地開催予定でしたが、中国武漢発コロナパンデミックの影響により、延期および開催方式の変更を余儀なくされました。海外講演者のキャンセルやWebへの移行の作業もありましたが、おおよそ例年と同数の演題登録があり、内容的にはたいへん充実したものであったと自負しております。現地には80名と寂しい参加数でしたが、後日2月のオンデマンド配信を併せて結局900を超える登録者が視聴参加されました(図1, 2)。12月のコロナ第3波立ち上がりとなり、高知

県は折しも感染拡大地域に指定された直後でもあり、懇親会は中止、町中のレストランなどの飲食店も20時閉店要請が発出されたため、現地にお越しいただいた先生方にはたいへんご迷惑をおかけしました。

学会テーマ

今年の学術大会のテーマは「FACE THE SELFISH SKIN; 利己的な皮膚に対峙するサイエンス」といたしました。ポスターには亡父のダーマトロジー油絵の1つ、裸婦背部に生じたヒトの顔(FACE)にみえる膨疹の絵を採用しました。このような蕁麻疹をはじめアレルギー・膠原病は、しばしば皮膚に描く図として表現されますが、それら



図1 集合写真



図2 看板と会場前に設置した4mのクリスマスツリー

は利己的であり、主(あるじ)を困らせます。ドーキンスの「利己的遺伝子」から拝借した“SELFISH”な疾患群に対して、サイエンスが対峙(FACE)し攻略するヒントを考えることが本テーマの本意です。

多彩かつ充実したプログラム

現地発表, Web (Zoom) 発表および事前登録パワーポイントファイル発表で行われました。座長も現地とリモートでお願いし, Webinerでの討論を仕切っていただきました。ほとんどの演題において滞りなくコミュニケーションでき, ハードも含めて大過なく進行できたのは, 12月の時点ではお互いこの形式に慣れておられていたせいと思考いたします。

1. 一般演題

160題を超える一般演題は, 本学会の成り立ちの背骨である抗原研究会(薬疹), パッチテスト研究会(接触皮膚炎), 脈管膠原病研究会のそれぞれ独立した流れのものと, 免疫アレルギー疾患に対するバイオ等を中心とした新しい治療法のトピックスが新たな潮流でした。これら演題の中でとくに優秀なものを, 事前に本学会の選考委員により計11の優秀演題賞(金1, 銀2, 銅8)を選出しました(図3)。

2. シンポジウム

コロナ禍ゆえ, 国内海外からの現地参加が不安定

であったため, 特別講演, 招聘講演はなくし, すべてシンポジウムとして13本企画しました。皮膚科のみならず他科における免疫アレルギー学, 分子・細胞生物学的な基礎医学からも多彩なテーマで掘り下げました。シンポジウム6「植物免疫, 昆虫の行動を変容させる寄生虫の存在が淡水魚や水中植生, 森林を制御する」という非常にアカデミックにエキサイティングなシンポジウムはひとえに佐野の独断で成立しました。緊急シンポジウムはコロナ感染症を免疫学的に考える目的でした。以下, 順に紹介します。

①Cutaneous Immunology over the World: スイスのMichel Gilliet博士の乾癬病態における免疫学, および米国Kevin D. Cooper博士によるcutaneous T cell lymphomaについてのご講演。

②食物アレルギーの最前線: 高知大学・山本真有子先生による新規魚アレルギー抗原, 相模原病院の海老澤元宏先生による小児アレルギー, 島根大学の森田栄伸先生による食物依存性運動誘発アナフィラキシー, 口腔アレルギー症候群。

③アトピー性皮膚炎の理解と新治療: 兵庫医科大学・西岡清先生がアトピー性皮膚炎の概念を歴史的にご講演され, 引き続いて機序, デュピルマブによる革新的治療につき, それぞれ東京理科大学生命医科学研究所・久保允人先生, 藤田医科大学・矢上晶子

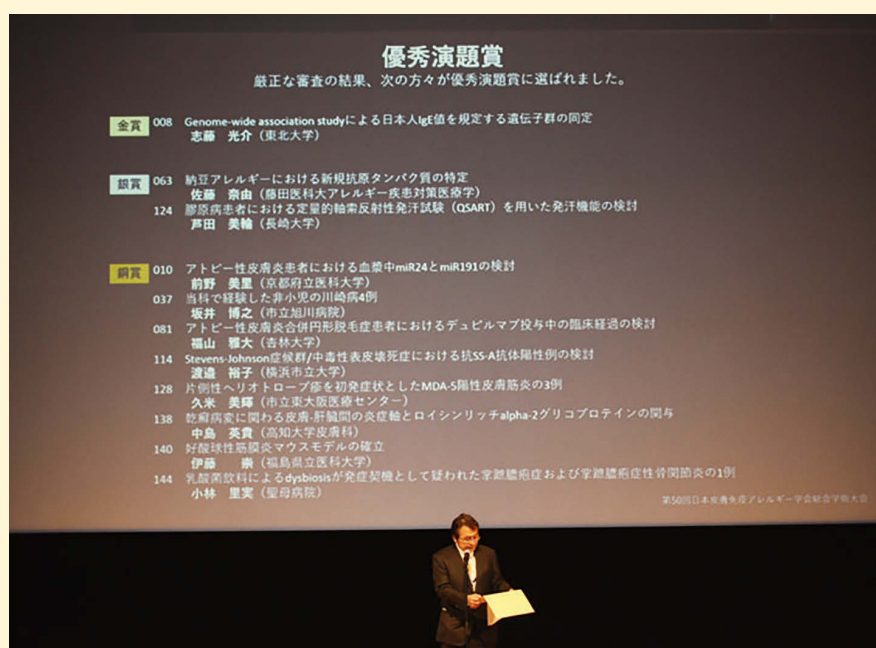


図3 優秀演題賞の発表

先生、大阪はびきの医療センター・片岡葉子先生が講演されました。

④炎症細胞のホットトピックス：東京医科歯科大学免疫アレルギー学の佐藤荘先生による線維化に関わるマクロファージ，宮崎大学免疫学の佐藤克明先生によるpDC，防衛医科大学校の佐藤貴浩先生による好酸球，東京医科歯科大学炎症・感染・免疫学の烏山一先生による好塩基球。

⑤関節・腸管の免疫病：高知大臨床免疫学の藤本穰先生によるバイオ製剤と疾患，慶応義塾大学消化器内科の金井隆典先生による肝脳腸管神経反射の役割，慶応大リウマチ膠原病内科の竹内勤先生による免疫疾患のオミックス解析。

⑥植物の免疫および昆虫寄生虫と森のエコロジー：東京大学農学生命科学の藤井壮太先生による雌への受粉機構(自己と非自己識別)，弘前大学農学生命科学の山尾僚先生による巻きひげの自己・非自己認識，神戸大学理学部の佐藤拓哉先生によるハリガネムシ寄生による昆虫の行動操作と森生態系エネルギー流について。

⑦かゆみがつなぐ神経と皮膚：九州大学免疫遺伝学の福井宣規先生によるIL-31，東京慈恵会医科大学神経科学の加藤総夫先生による脳が感知する痒み，長崎大学の室田浩之先生によるアトピー性皮膚

炎の痒み。

⑧重症薬疹の本質：理化学研究所の蒔田泰誠先生による遺伝子検査による重症薬疹回避，四国がんセンターの藤山幹子先生によるDIHS，昭和大学の末木博彦先生によるSJS/TEN全国調査の結果。

⑨蕁麻疹をやっつけよう：広島大学の高萩俊輔先生による慢性蕁麻疹の病態と治療，九州大学の中原剛士先生によるオマリズマブの使用法，関西医科大学の谷崎英昭先生による蕁麻疹の評価法。

⑩AIバイオサイエンス：山口大学システムバイオ講座の浅井義之先生によるシステム医学・医用AIについて，理化学研究所の清田純先生による深層学習の応用，理化学研究所・千葉大学AI医学の川上英良先生による機械学習と医学データ解析。

⑪メラノサイトと免疫：藤田学園大学メラニン化学研の伊藤祥輔先生によるメラニン化学，化石中メラニン構造変化，東北大学生命科学研究科の福田光則先生によるメラノソーム，山形大学の中野祥子先生による炎症後色素沈着モデルマウス。

⑫癌免疫のトレンド：高知大免疫学の宇高恵子先生による癌血管内皮細胞による癌抗原提示，富山大学免疫学の岸裕幸先生による単一T細胞解析を用いた腫瘍特異的TCR，山口大学免疫学の玉田耕治先生による固形癌に対するCART-T細胞システム。



図4 A会場シンポジウムの風景

⑬特別緊急シンポジウム「新型コロナの発疹，治療法とワクチン開発最前線」：京都大学大塚篤司先生によるCOVID-19に伴う皮疹，大阪はびきの医療センターの田中敏郎先生によるトシリズマブによる肺炎治療，大阪大学臨床遺伝子治療学の森下竜一先生によるワクチン開発の現状(図4)。

3. 特別企画「令和の脈管膠原病研究会」と尹浩信先生メモリアル

4年前に当学会にマージされた脈管膠原病研究会を，オリジナルに近く半ば独立した形で2日間B会場を独占して再現しました。ミニレクチャーでは目黒 陳皮膚科クリニック・陳科榮先生のリベドイド血管症，大阪大微生物研究所の荒瀬尚先生によるHLA classIIが関与する新たな膠原病発症機構のご講演をいただきました。さらに「尹浩信先生メモリアルレクチャー」と題し，東京大の浅野善英先生には尹先生の業績レビューをしていただきました。3月に急逝された尹先生がなさった強皮症における線維化機構の画期的な仕事の数々をご紹介いただき，あらためて日本皮膚科学会における大きな喪失を実感させられました。

4. 企業セミナーおよび学会ランチョンセミナー

23本を数える企業セミナーは先般来の新規治療薬開発もあり，多岐にわたり内容が充実したものが多数ありました。紙幅の都合で詳細は省きますが，後日のオンデマンド配信もされなかったため，聞き逃しが惜しまれました。第3日目のD会場では学会主催ランチョンセミナー，「ウイルスと皮膚疾患」が開かれ，東京大医科学研究所の川口寧先生によるHSVの免疫回避機構，高知大微生物学の大畑雅典先生によるポリオーマウイルスと皮膚疾患の最新の話題が紹介されました。

5. その他のプログラム

共同研究シンポジウムは，当学会が支援する5つのプロジェクトが発表されました。英文学会誌であるJCIA誌への最優秀論文賞は，浜松医科大学の伊藤泰介先生，東京医科歯科大の宇賀神つかさ先生に授与されました。免疫アレルギー最近の進歩；

専門部会報告として6つの報告がなされました。専門医共通講習では筑波大学の古田淳一先生，東北大の山崎研志先生により研究倫理と学会発表のポイントの話題を頂戴しました。3日目最後に，第5回重症薬疹診療拠点病院認定に係る講習会も催されました。

おわりに

第3波が襲うクリスマス前の，しかも平日のハイブリッド開催であり，12月に入ってからでは現地予定参加者数が日々減少し，筆者は現地開催にこだわったことを少々後悔しました。しかし学会初日，複数の先生方に会場で「佐野なら，現地開催も絶対やると確信していた。半年以上県外に出ていなかったが高知に來られて本当に嬉しい」といわれて，救われました。学会で生身の人間との交流がいかに大切か，また，眼前でのプレゼンの説得力の魅力を改めて思い知った次第です。コロナ社会では多くの常識が変容しました。他の大学同様本学でも，対面講義に代わり講義はほとんどWeb配信となりましたが，意外なことに(?)学生にはこれがたいへん好評で，コロナが明けても今後も対面よりWeb配信を続けて欲しいとの声が圧倒的多数でした。筆者には軽いショックでしたが，今回の学会内容が2月一杯オンデマンド配信され，そのほとんどを拝聴し，学生のような感想も無理はないと思いました。しかしそれは，講演された内容そのもののレベルの高さと，(自慢になりますが)プログラムの素晴らしさで担保されたものです。最後に，事務局長の中島喜美子准教授，教室員一同，物心ともに支援していただいた高知大同門会，高知皮膚科医会の先生方，本学会の理事の先生など企画の助力をいただいた方々，運営についてはコンベンションフィールド社，そしてなによりも現地に足を運んでいただいた先生方，Web参加していただいたすべての先生方に，心より御礼申し上げます。